

胡馬は何を嘶いたか

~~胡馬は何を嘶いたか~~

反近代

——向井夷希微の第三詩集——

康見 糸子 生

~~向井 豊 昭~~

塾一つ建てるかわりに詩集を出したのは、

昨年の五月二十九日。祖父、夷希微（永太郎）

の命日であった。夷希微の詩に、わたし、そ

して妻の恵子の詩を添えた詩集「北海道」で

ある。夷希微はとくにあの世にいつてしま

ったので、同意を得るすべはなかつたが、無

名の彼の詩の価値をもう一度かんがえてもら

いた、という気持が、詩集を出した動機の一

つであつた。そんな動機のことなどは、詩集

のあとがきに書いてみたが、そこに長々とは

書けなかつた彼の第二詩集「胡馬の嘶き」に
対するわたしの思い入れを、ここに書いてみ
たいと思ふ。

田舎を恐る

萩原朔太郎

わたしは田舎をおそれる、

田舎の人氣のない水田の中にふるつて、
ほそながくのびる苗の列をおそれる。

2
くらい家屋の中に住まづしい人間のむれを
おそれる。

田舎のあぜみちに坐つてゐると、
おほなみのやうな土壤の重みが、わたしの心
さくらくする、
土壤のくさつたにほひが私の皮膚をくろすま
せる、
冬枯れのさびしい自然が私の生活をくろしく
する。

田舎の空気は陰鬱で重くるしい、

田舎の手触りはからからして気もちがわるい、

わたしはとまどき田舎を思ふと、
きぬのぬらひ動物の皮膚のほみに悩まされ
る。
わたしは田舎をおそれる、
田舎は熱病の青じろい夢である。

日本の近代詩の記念碑的な作品といわれる
萩原朔太郎の詩集「月に吠える」が世にあ
られたのは一九一七年の大正六―七月のこ
だという。三十五才の向井夷希微が北海道か

ら上京したゆへは、同じ月である。北海道庁拓
殖部林務係、札幌管林区署、札幌管林区署函
館分署と、~~おぼろげに~~十年を山役人と働きつ
づけてまた~~のちまた~~ ^{五月}後の五月、第一詩集
「よみがへりしを」七月には第二詩集「胡馬
の嘶きしを自費出版する。十年間の勞働によ
つて得た退職金を彼は二つの詩集に注ぎこん
だのだ。

磨かれし夜の空、

雨はれし後のかがやき、
星こぼれく生きかへり
月天心に円かなり。

「よみがへり」の冒頭をかざる「月天心に」
の第一連である。上京一ヵ月後の三月に書か
れたこの詩には、朔太郎の自由な口語体はな
く、自我の悶えもない。定型の文語体にだか
れ、夷希微の心はすっほりと満ちたりている
のである。

「父なる神に捧ぐ」という献辞を扉にかかげ
ているこの第一詩集は、キリスト教徒であっ
た夷希微の長い文学的徂迷のはてに世に問わ
れた詩集であった。彼は正しく満ちたりてい
たのだ。しかし、詩人であろうとし、キリス
ト教徒であろうとする彼の目が、この世のひ
かみを映すことをせられたわけではない。北海
道風物詩。といつサブタイトルがつけられた
第二詩集「胡馬の嘶き」で、彼の目は大きく
見開かれた。わたしは思う。

無残なる破壊の時
は来れり。
三百年の森の生命は
今刻々に減ひ行くなり。

牙を鳴らしして

鋸はかゝりぬ桂の樹、

目を光らして

斧は躍りぬ菩提樹に。

森の群雄白樺、

刺桐はりきりに榛の樹に

皆悉く倒れ行く。

緑のほこり皆きえて

淋しく立てる雑木林の冬なれど、

群がる樹々の枝繁り

鬱ふさとこもりし森林の

今し生命の根に蝕くされ

減ひ行くなる様を見よ。

点々と伐株は列が雪の上、
幽霊の如く截面が光る中に
うごめくものは熊なるか。

黒き筒袖外套に

頭身を包みあげ、

此処にさしきし冬の日の

明るき光仰ぎ見て、

深き喜夜に一服の煙草を吹かす

そは人間に外ならず。

彼は開墾者なり。

三百年の森の生命を犠牲として

此処に開くなり新天地。

此処に生むなり人間を。

「胡馬の嘶き」の冒頭の「~~幕~~開墾の後

~~半部~~。これは北海道の近代化、それを

推進する人間への手はなしの賛歌だろうか。

そうではない。「無残なる破壊」のはこの終

連は、暴力的な近代化のイロニーであり、

自然に対する人間の位置を、彼は「吹雪」と
いう詩の中であからさまにするのだ。
~~後半部のみを引用~~

雪が降る。雪が吹く。
晦冥の天地の間
雪が唯生きさへ傷く。

汽罐車の苦闘の汗は
刻々に氷り行きけり。

汽罐車の息は絶え絶え。
雪が降る。雪が吹く。
最終の悲鳴をあげて
汽罐車は終に斃れぬ。

シガカシキ人々揃って
冷蔵魚の如く
積雪の中に埋れて
横はる列車一聯。

新刊の汽車一輛。

新刊の中江丸。

新刊の熱心。

新刊の...

新刊の...

新刊の...

新刊の...

新刊の...

新刊の...

或るかたは、産業の途にのりこむ

十年の月日塵のうらに過ぎぬ

ふりて見れば自由の里は

すべし雨の山千里の外にありてす。

比目を活しし天外をのこめは

をちかたの言峰の雨の朝日影

鳴呼山林に自由存す

われこの句を吟いこゝのわくを覺や。

なつかしきわが故郷は

彼処にわがは山林の男

願われは千重江山

自由の郷は雲を底に染むとす。

晦冥の天地の間
雪が唯生きて働く。

一八九七年の明治三十(一) 国末田独歩は「国民之友」に一つの詩を発表した。~~と~~。二年
前の秋、空知川流域の旅をした時の印象をう
たったものだ。

山林に自由存す

① 山林に自由存す

われ此句を吟じて血のわくを覚ゆ

嗚呼山林に自由存す

いかなればわれ山林をみすこし

独歩の書いた「山林に自由存す」の第一連

~~である~~の山林は、漂泊者の~~観念~~の山林で

あった。とわたしは思ひ。山役人として生き

ねばならなかつた夷希微にとつて、「三百年

の森の生命は、今刻々に滅び行く」ものであ

り、貪しい人々の盗伐の地、それを見はらな

ければならない場所こそが、山林なのであつ

た。

へ吹雪にまじる鏝の屑、／海のうなりと銭の
音、／漁師の腕は木に向ひ、／漁師のまなこ
他を見る。／胸の吹雪と荒浪は／林務官吏の
魔の姿。✓という「盗伐」の終連。そしてま
たへ春山に小鳥歌へど、／開墾の火入の煙／
気にかゝる山火の虞れ。／ひねもすを勞し勞
して、／親める自然の影に／幽妙の美をも探
れず。／現実には胸に重たし／当月の支給の旅
費高。✓という「森林監守」の第五連――

山役人になる以前、妻希微は函館で英語の
私塾をひらいていた。「幽妙の美」を探って
いたそのころの彼の~~ゆゑ~~詩は「よみがへ
り」の中に収められている。その中の一つ、
「後方羊蹄山」の終連を抜きだしてみよう。

八洲やしまの外の暇夷が島、

大船に煙たゝして

我が越えて行く後志しりべしの

沖べより陸見さくれば、
あな莊巖おごそかにそり立つ
島つ富士しりべし後方羊蹄山やまや。

山役人となり、開拓の現実にはぶつかりつづ
けた夷希微は「親める自然の影に／幽妙の美
をも探れず」ほとんど詩作ができなくなつて
しまふ。十年を経てその生活を断ちきつた彼
は、彼をしめつけていた現実への恨みをはら
すかのように、~~それまでの詩~~新しい目で北海道を

書きはじめたのだ。「よみがへり」は北海道
時代の作品も収めているが、「胡馬の嘶き」
の作品は、すべて上京後に書かれたものであ
る。都にとびだすことによつて、現実として
の北海道を描けたということ、なんという
悲しい矛盾なのだろう。

流

武者小路実篤

豊平川の堤に
腰かけて

美なる格川を見よ表外は三つ見ている。

一九三三年の大正十三(一)の年である。

石狩川の鮭

雄快晴るる北海道の春の空

石狩川の鮭の経の味いかに

北斗星下の地海を民に

発潮の文、教養を与うる鮭

その札幌農学校若き学生時代

古き記憶が鮭のこもくわき起れり

紅のニろは名産鮭の

赤い美しい肉を思いう

北浜大島の土身考し石狩川の味い

鮭より清く、男社に世に好れり

天香竹も石狩川の鮭を見よ。しかし、天香竹の見

てもうは、そわわわわわわわわわわ

石狩川の鮭の味いかに
北斗星下の地海を民に
発潮の文、教養を与うる鮭
その札幌農学校若き学生時代
古き記憶が鮭のこもくわき起れり
紅のニろは名産鮭の
赤い美しい肉を思いう
北浜大島の土身考し石狩川の味い
鮭より清く、男社に世に好れり
天香竹も石狩川の鮭を見よ。しかし、天香竹の見
てもうは、そわわわわわわわわわわ

川の面を見つめてゐると
流れてゆく、流れてゆく、
ぴしゃく〜と白浪立てながら
流れてゆく、流れてゆく、
自分をさそひこむやうに、
さそひ込まないではおかないやうに。
自分は笑った。

11

この詩は一九二一年（明治三十四年）札幌で
わがかの目を過した時の印象によつて書かれ

たものだと。武者小路の見た豊平川は、
石狩川に注いでいた。その石狩川は希代の
長たもめは何なり。『~~カヌー~~』の附半
~~部を書きなしてみたり。~~

カヌー

日本一又長い川、石狩川、
その川にのぼる鮭の魚、
年々に人にとられて
やうくに減りて行くなり。

魚の命惜しくあうねど
 人の生きる為にしあれば、
 高設の人工孵化場が出来て、
 鮭の魚の保護をするなる。

川上の蒲郡の村に
 まだ残るアイヌの部落。

このあたりアイヌが占めし
 そのかみ々サマと変りて、
 山も野も明るくなれば

いつしかも悲へにける此部落。

所有地の権利定むる
 法律の手続知らず、

山に棲むけものと共に
 逐はるれば逃げて行くなり。

生業の山猟すれど

追々に獲もの少く、
 家づくり暖をとるとて

おのりりおすゝん

おのりりおすゝん

おのりりおすゝん

おのりりおすゝん

おのりりおすゝん

おのりりおすゝん

おのりりおすゝん

おのりりおすゝん

おのりりおすゝん

おのりりおすゝん

おのりりおすゝん

おのりりおすゝん

おのりりおすゝん

おのりりおすゝん

おのりりおすゝん

おのりりおすゝん

おのりりおすゝん

51

木をきれば山林の
官吏に睨めらる。

禁制の川のすなびり

密漁の鮭をいだきて

酒買ひに里に出でては

狡猾の和人に欺され、

得る所いとも少く、

心 払ふものいよゝ多かり。

大正六年の7月に吠える」と「胡馬の嘶き

—日本の詩史の大まな節目となり、た前者の

近代感覚、文語の定型詩との絶縁—上り坂の

近代の中にあつて、時流に~~な~~れた定型により、

~~近代~~批判~~の~~夷希微の詩は、~~流~~流~~れ~~と~~有~~り

~~流~~運命にあつた。しかし今、~~朔~~朔太郎

とおびやかした田園は荒れ、~~米~~米~~と~~と~~ま~~ま

~~築~~築きあげられた近代は問い直されて

その問い直しを、夷希微の詩は亦~~余~~余年前に

おこなつていた~~か~~か~~は~~は~~し~~し~~は~~は~~書~~書~~い~~い~~き~~き~~つ~~つ~~て~~て

終りの~~か~~か~~は~~は~~し~~し~~は~~は~~書~~書~~い~~い~~き~~き~~つ~~つ~~て~~て
これやうい。